

博士号学位申請論文要旨

人文科学研究科 日本文化専攻 博士後期課程 3年

618D002 小橋 龍人

「古今集」の「うた」における形成と展開

本論文は「古今集」の「うた」における「形成」と「展開」について扱い、いままで「展開」として捉えられてきた「うた」の写本間の本文異同や、伝承を負った「うた」などが、「古今集」成立以前の形成段階にさかのぼれる面があることを論じた。

最初に序章「古典作品における「形成」と「展開」の二つの観点」では、本論の重要な概念である「うた」と、「形成」と「展開」について、概念規定を行う。

「形成」とは、「古今集」が成立する以前の「うた」の在り方である。「展開」とは、「古今集」成立後の「うた」の変容である。原本が残っていない古典において、作品の「成立」を問うのは難しい。「形成」の観点から「うた」を明らかにする観点で解き明かすことも重要である。

そもそも、「うた」には、歌集における「和歌」という在り方とは別に、歌集から離れても享受される在り方がある。『源氏物語』の引歌や、『和漢朗詠集』に代表される朗詠などの性質が、典型的といえる。後世には謡曲や落語などの題材にもなった。

この「うた」の性質は、従来の平安期の「和歌」の研究では、全くかえりみられていない。従来は、「和歌」の立場から古今集を論じることが多かった。それは洗煉された文学様式であり、作者性や書記性といった観点を有する「和歌」である。本論文は、口誦歌などの伝承をも内包した、より上位の「うた」という捉え方で論ずることを試みた。

まず、第一章「「古今集」における年代区分の再考」では、従来の「古今集」年代三期区分論（「読人知らず」「六歌仙」「撰者」時代）に関連する学説を整理し、「うた」の年代性には「詠作者」「表現」「場」の三要素が認められることを指摘した。そして、この観点から、近年も利用される小沢正夫の年代区分論には、三要素の年代性の齟齬によって、いくつもの問題があることを指摘した。

従来の研究の不備を批判し、その中で「表現の年代性」という要素から「うた」を年代的に分析できる可能性を指摘した。

次に第二章「「うた」の伝承と歌人像の「形成」——「歌詞」が連想させる左注の詠作者像——」では、「古今集」の「うた」に記されている左注の人物名をどう捉えるべきかを考察した。

この左注は、「古今集」が「成立」した後の時代の人によりつけられたとする説があ

るが、しかし、左注は、系統を異にする「古今集」の諸本にほぼ例外なく付されており、写本「展開」上の変容とも言い切れない。

本章では、史実的な事蹟とは別に、左注の人名が、「うた」表現と関わりあい、一つの詠作者像を結ぶ可能性があることを指摘する。これは万葉集でも起こっている「うた」の本質的な現象である。「古今集」もまた、伝承を抱え込んで「形成」されていると考えられる時、従来の研究が「展開」として捉えていた部分を、万葉集の「うた」が詠まれていた時代からの、「うたのことば」の像と関わった、「うた」の「形成」の構造的問題であることがあり得るだろう。

この論証を題材として、万葉歌人でありながら全く異なった姿で平安期に存在している「人麿」の「うた」を中心に論じ、その伝承が「古今集」以前における段階のものとなり合って捉え得ることを、論じた。

以上の二章は、「古今集」以前の詠作者の認識を捉え直す論である。これらを踏まえ、以下で具体的な表現の分析を行う。

まず、**第三章「表現様式の年代性と詠作者の世代——類型表現「つつ止め」——**」では、表現の年代的な移り変わりが「古今集」の「うた」に認めうることを、世代ごとの「つつ止め」（「うた」の結句を「つつ」で終える形）の有無から論じた。例えば、「つつ止め」は万葉集の「うた」にもみられ、「古今集」の「うた」においては、前代の「うた」に負った古いスタイルと認められる。だが、その後の世代である六歌仙には「つつ止め」の「うた」が一切みられない。にもかかわらず、撰者たちの「うた」には「つつ止め」が一定数みられ、他にも撰者と同時期の詠作者の詠作にもみられる。

この表現の在り方は、現存する私家集を見渡しても同じで、業平、小町、遍照という六歌仙の名を有する私家集でも、「つつ止め」は一切みられない同一の傾向を示している。ここから、「うた」の表現は、「古今集」においても、世代ないし時代と密接であると考えられる。この章では、世代を手掛かりに、語法という表現の年代性の観点が「うた」にみられることを指摘した。第一章で指摘した表現の年代性が、表現の上で具体的に明らかとなることで、「古今集」が「成立」する以前の「うた」における「形成」過程を、表現の年代性の観点から考え得ることを論じる章である。

第四章「べらなり」という語の年代性」では、「古今集」時代に流行したとされる「べらなり」という助動詞に注目して、この語の時代的な在り方を論じた。この表現（「べらなり」）は、平安初期の訓点資料にもみられ、「古今集」の「うた」にも夥しくみられるが、平安中期以後は全くみられない。万葉集の現存する訓にもないが、しかし『人丸集』、『赤人集』、『家持集』といった、万葉集に「うた」が残る代表的な歌人（「万葉歌人」）の名を有した平安期の私家集には、いくつみられる。それら「万葉歌人」の名を持つ私家集を、万葉集の「うた」と区別するのは、「うた」の風体からいえば起こりうる視点だが、「古今集」の「うた」において「べらなり」の例を確認すると、そこには弘仁年間生まれの遍照と在原行平の「うた」に見られる他、左注で「高

津内親王」と「柿本人麿」のものとする「うた」にもみられる事実が確認される。

高津内親王は嵯峨天皇時代の妃で、人麿には仮名序に平城天皇へ仕えたという伝説があり、それは嵯峨朝の直前の大同年間であって、ともに九世紀（八〇〇年代頃）初頭になる一致をみせる。この時、「べらなり」という語は、漢文訓読語として九世紀（八〇〇年代頃）初頭の訓点資料にみられることもあって、この時代の表現としてあり得たことを示すのであるが、人麿の「うた」に関していえば、語法が「伝説」として語られる年代と一致する。このことは「古今集」に「うた」の残る歌人や人物らにとって、「べらなり」が「万葉歌」由来の語とみなされえたことを想定させる。

この章では、表現語法が年代と密接であるがゆえに起こりえた「伝説」ないし「うた」の伝承の萌芽の可能性を指摘した。諸論は、「伝承」の人麿を「古今集」以後の「展開」における現象と捉えるのが通常だが、「べらなり」という表現の時代性からすれば、人麿の歌にも「べらなり」が用いられていることは、まさしく「古今集」以前の「うた」の「形成」として捉えるべきではないかと論じたものである。

第五章「九世紀の「うた」にみられる漢文訓読的表現の考察」では、「古今集」の「うた」にみられる漢文訓読的表現に注目する。訓読特有語は、一般的には和文ではあまり用いられないとする築島裕（『平安時代語新論』東京大学出版会 一九六九年）の研究がよく知られている。訓読特有語と和文における語は、位相差があるとするものである。だが、同氏の分析は『源氏物語』を用いたもので、「古今集」とは一〇〇年ほどの年代差がある点に考察上の比較として問題がある。

加えて、「古今集」の「うた」では、平安時代中期以降の訓読特有語が一定数みとめられる。このことは、築島が「古今集」の「仮名序」や『土佐日記』には訓読特有語が比較的多く見られると分析していたことと、史料の年代としては一致する。ここにまず、延喜年間（九〇〇年代初頭）までには「うた」においても漢文訓読的表現が用いられうることを想定できる。

だが、その中には万葉集の「うた」の訓とも一致するものがある。そのため、分類上は、漢文の訓読と、「うた」のことばとして用いられていたであろう万葉集の「うた」の訓に由来する訓読語を区別することができる。その中で訓読語を手掛かりに、この時代の「うた」を成り立たせる語として漢文訓読的表現が用いられている側面があることを指摘した。

平安時代中期以前の言語の古態を「古今集」はまだ留めている点で、これは古今集の「形成」を考える時に重要な観点となることであろう。

第六章「平安期写本の本文異同と「展開」——業平歌「うゑしうゑば」異文考——」では、「古今集」の定家本において、「うゑしうゑば」という特殊な語を有する業平の「うた」に「うつしうゑば」の異同があることへ注目した。従来は誤写説で片付けられているが、この本文異同について、諸本の問題と、語法の年代性の問題から考察し、また、九世紀（八〇〇年代頃）の表現を支える「うた」の観念を考えたとき、用例か

らも「うつしうゑば」の蓋然性が高いことを指摘して、「うゑしうゑば」の形が、平安期の「うた」の変容の過程で出てきている可能性が高いことを論じた。これは、「古今集」の「うた」がそもそも伝承を抱えていたことから起こりうる、「うた」の表現の「展開」とみなせる。

終章「**「古今集」の「うた」の研究を進展させるために**」では、以上を踏まえて「古今集」の「うた」の研究についての方法を整理した。以上の諸論を通じて確認されるのは、「古今集」の「うた」に歌集「成立」以前の「形成」の段階がみられるということである。それは左注や本文異同により実証的に指摘できるものであった。従来の研究が、現存する写本や関連する史料の年代から、本文異同や左注を、歌集「成立」以後の「展開」の段階のものと考えていることについて、別の視点も考え得る必要を指摘し、「うた」として考察することの重要性、また、今後の研究への発展性と絡めて論じた。

本論文は、以上の構成をとって、「古今集」の「うた」の「形成」を明らかにし、従来、「展開」とみられていた諸現象などに批判を加え、その研究方法をも示すものである。